

開封ユダヤ人攷

塩 崎 幸 雄

- 1 なぜ、〈開封ユダヤ人〉を論ずるのか
- 2 〈開封ユダヤ人〉の発見
- 3 〈回族〉〈回民〉と〈回儒〉
- 4 近年の研究成果
- 5 (以上、本稿。以下、未定稿)
- 6 Tay-Sachs 病 (Tay-Khazar 族論)
- 7 〈開封ユダヤ人〉をいかに見るべきか

1 なぜ、〈開封ユダヤ人〉を論ずるのか

世に永久しじふなえなるものなしといえども、〈開封ユダヤ人〉の存亡くわいはうを想うとき、一抹の悲哀の念を覚ゆるを禁じえない。〈開

……視みよ是これは項うなじの強こほき民たみなり

——「出埃及記」第三十二章第九節

封ユダヤ人へのもたらす悲哀とは、多数者のなかに埋没しゆく少数者の悲哀である。史書を繙かんと思うほどの者ならば、この少数者の惻々たる悲哀の聲に耳を傾ける用意を常にもたねばならぬであらう。

かの地、漢土にあつては、秦平の時が悠久滔々と流れていた。迫害彈圧の暴風ではなくして、安穩たる鼓腹擊壤の陽光が燦々と降り注いでいたのである。その瀾漫せる秦平の時の流れのなかにあつて、かれら民族の終末がゆくりなくも到来したのである。このことが更なる悲哀を、歴史を回顧する者の胸中にもたらさずにはおかないのである。

いかにして「魂の征服」がなされたのか。神をして項強き民とすら言わしめたほどのイスラエル民族の不屈の魂魄は、いかにして根絶しつくされてしまったのか。——「開封ユダヤ人」と歴代諸王朝との間には、かのアンデスにおけるが如き苛烈極まりない信仰的苦悶と抗争とを微塵も見出だすことはできない。しかのみならず、むしろかの地に支配していたものこそは、ユダヤ人に対する確乎不動の「無関心」であつたのである。この「無関心」こそが、民族伝統に対する危機意識の弛緩をもたらし、信仰的基盤の喪失を招来した最大の因由にほかならない。

このように觀察を試みてみると、「開封ユダヤ人」消失という史実からもたらされる悲哀とは、あらゆる弱者の悲哀に通底するものであることに想到するのは至極容易なはずである。いつの世にあつても弱者は強者の「無関心」に取り囲まれつつ、生活存続のために「融通」と「妥協」とに終始せざるをえない境位に立たされている。現代においてもその様相は規模の大小を問はずあらゆる場面で展開されているのである。

強者、多数者に与する者が、このような少数者の悲哀を共有することは決してありえない。秦平を謳歌する強者、多数者が、信仰的哀歎を味わうことは決してない。なぜならば、信仰をめぐる苦悶とは少数者、弱者の専有物だからである。試みに歴史をふりかえつてみよ。禁教時代のキリシタン、明治維新後における幕臣、戦時下におけるマルクス主義からの転向者、そして「漢奸」と指弾された汪精衛政権の人々、また、李容九をはじめとする「日韓併合」時の親日派などの姿に強者のはざままで苦悶する同様の少数者の悲哀を見出ださざるをえないのではなからうか。

しかしながら、いま列举した事例は動乱紛争の世における悲劇の犠牲者なのであつて、「開封ユダヤ人」の如く安穩秦平が長年月にわたつて支配した状況下における事例と同列に論ずるにはいささかの困難が伴うであらう。

史上に「開封ユダヤ人」の運命と同様のものと比擬すべき事例を捜し出だすとすれば、筆者はまずなによりも敗戦

後の日本人に指を屈せねばならないと思う。強者による安穩な状況下における民族伝統の消滅という目に見えざる惨劇。〈開封ユダヤ人〉の史実のなかには、抗しえぬ強大な力に押し流されて滅びゆく者の無言の絶叫がこだましているのである。

2 〈開封ユダヤ人〉の発見

河南省開封府におけるユダヤ人共同体の存在についての最初の報告は、よく知られているようにイエズス会宣教師マテオ・リッチ（利瑪竇、一五五二—一六一〇）によるものである。

……わたしたちはこの王国で古いモーゼの律法に従って生きるジュデア（ユダヤ）教徒も発見した。とはいえ、これはごく少数の家族にすぎず、ホーナン（河南）省の省都カイフンフ（開封府）とチエキアノ（浙江）省の省都ハンチエオフ（杭州府）のほかには、彼らの教会堂があるところを知らない。ここではエブレオ（ヘブライ）文字で羊皮紙に昔の様式に従って句読点を用いずに書かれた巻き物の「モーゼ五書」が、深い崇敬をこめて保存されている。「旧約聖書」のほかの各書については、彼らがどのくらい持っているのか、わたしたちにもまだわかっていない。彼らは割礼の儀式を保っており、古い習慣に従って、豚肉その他の穢のある肉をまったく食べない。（マッテオ・リッチ『イエズス会によるキリスト教のチーナ布教について』（Matteo Ricci, *Della entrata della Compagnia di Gesù e christianità nella Cina*）第一の書第十章「邦訳『中国キリスト教布教史』第一卷（『大航海時代叢書』第Ⅱ期第八卷、川名公平十矢沢利彦十平川祐弘訳、岩波書店、一九八二）百二十二—百二十三頁）

リッチらの入明（一五八二）は、同時代の李贄の言によつてもうかがわれる如く、カトリック布教を意図したものである。それとともに、唐朝以来のキリスト教布教の痕跡を探りあて、その再興を図る意趣も併せもっていた。だが、予期せぬことに、イエズス会士について触れたある俗書を読んだというユダヤ人が、北京のリッチを同胞と誤解して訪問してきたのである。これが〈開封ユダヤ人〉の存在が明らかとなる発端であった（以下、本節での引用は、リッチ、前掲書、第五の書第四章〔邦訳前掲書第二卷（『大航海時代叢書』第Ⅱ期第九卷、川名公平十矢沢利彦訳、一九八三）三十二—三十八頁）によるものである）。

彼はホーナン（河南）省の省都の出身で、姓をシガイ（艾）といい、すでにチーナの文科の学問でリチエンティアート [Licentiate]（現代風に言えば主に高等学校の）卒業証書取得者。ここでは挙人をさす——引用者注」の学位を取得して、この年（一六〇五年）、ドットーレ [dotto] 学士。ここでは進士をさす——引用者注」の試験（会試）のためにパッキノー「北京——引用者注」を訪れた。……彼は、わたしたちが、チーナに多いサラチエーノ（サラセン）人の教えを奉ずる者ではなく、「天の王」（天主）だけを礼拝する者であり、彼と同じモーゼの教えを奉ずる者だと確信した。そこでとても喜んで神父たちの家を訪れると、彼もわたしたちと同じ教えの者だと言った。彼の容姿はその鼻といい、目といい、顔つき全体といい、チーナ人とはまったく異なっていた。

シガイの姓名は艾田とされている。艾田は万暦元年（一五七三）の挙人で、リッチと対面したときは年齢六十ぐらいであつたと推測される。

マッテオ神父はただちに彼を小聖堂に案内した。ちょうど洗者聖ヨハネの祝日（六月二四日）にあつていたので、祭壇には、片側に幼な子イエズスを配し、片側には跪いて彼を崇める洗者聖ヨハネを配した、聖母の美しい飾り壁が新たに置かれていた。

ジュデーア人は、彼と同じ教えの人を見つけたかと思ひこんできたので、その画像がレベッカ（リベカ）と彼女の息子ヤークコブ（ヤコブ）およびエザウ（エサウ）を描いたものと信じて疑わなかった。それゆえ、彼はすぐさまその画像に礼拝を捧げて、言った、「わたしは画像を崇めたくはないが、これはもともとわたしを生んだ祖先のものだから礼拝したい」。聖堂の両側には四人の福音史家が並んでいたの、ジュデーア人は、あれは祭壇に描かれている者（ヤコブ）の二人の子供たちか、と尋ねた。神父は、彼が十二使徒のことを言っているのだ、と思ったので、そうだと答えた。神父は彼からもっと多くのことを聞き出して、どんな人物かを知ろうと、自室へ案内した。彼がジュデーア人であることは次第に明らかになった。むしろ、彼はジュデーア人だと名乗りもしなかったし、ジュデーアという名前も知らず、ただイスラエーレ（イスラエル）人であるとし知らなかった。神父たちがプランティノー（プランタン）の聖書「クリストフ・プランタン (Christophe Plantin 一五二〇—一五八九)」によってアントワープで印刷されたヘブライ語、カルデア語、ギリシア語、ラテン語併載の聖書——引用者注」のエブレーオ（ヘブライ）語を見

せると、彼はすぐに自分たちの文字だと認めたが、読むことはできなかった。

当初、リッチは艾田を予てより捜し求めていた失われたキリスト教徒の残族かと推測してか、祭壇や画像を見せたわけであるが、問答を重ねるうちに次第にユダヤ人であることが明らかとなっていた。だが、この「開封ユダヤ人の発見」は、皮肉にも一族の衰滅しゆくありさまの確認であったということが、ヘブライ語を読解できぬ艾田の姿からうかがい知ることができるのである。

この人からわたしたちが聞いたところによると、カイフン〔開封〕というホーナンの省都には、一〇家族から一二家族のジュデア人が住んでおり、一万ドゥカート [ducato 十三世紀以来欧洲各地で用いられた金貨・銀貨——引用者注] の費用をかけて再建された実に立派なシナゴークもあるという。彼らはまた羊皮紙に書かれ、五巻の巻物になった「モーゼ五書」を保管し、たいそう丁寧に扱っているという。彼らがこの地に住みついて、すでに五〇〇年から六〇〇年になり、ハンチェオ〔杭州〕というチエキアノ〔浙江〕の省都には、彼らの教えを奉ずるもつと多くの家族が住み、シナゴークもあるという。その他の地〔では〕、シナゴークがないために、ジュデア人は次第に消滅に向かっているという。彼らは豚肉を食べないので、チーナ人は彼らをマコメット〔マホメット〕の教えに従うサラチエーノ人とほとんど区別しないが、ジュデア人はその宗派を嫌悪している。

渡来年代に関する証言がある。この年代主張を信頼するとして、万曆朝から五百〜六百年前とすれば、趙宋前期（北宋）と擬定しうる。開封はかつて汴京と称し、後梁・後晋・後漢・後周、ついで北宋の都として五朝約二百二十年間栄えた。ちなみに杭州は南宋の国都・臨安である。ユダヤ人たちは宋代に渡来し、大都市での商業活動に従事して生計を立てていたものと推測される。

また、漢人がユダヤ人と回教徒とを同一視⁽⁷⁾し両者間の憎悪も認識していなかった、との記述が見えるが、これは、単に食事等に関する習俗面から得られた両者に対する観察結果によるものなのであり、いかに漢人が両者の信仰の内奥に無関心であったかの証左といえよう。

この機会にマッテオ神父は、彼がキリスト教徒の消息を何か聞いていないかと尋ねたが、彼はこの名前について何ひとつ答えられなかった。しかし神父がいくつかの手がかりを与えると、彼は、同じカイフン市にも、またリンチ

一ノ（臨晋。現在の陝西省大荔県）やシャンシ（山西）にも、彼らの先祖とともにチーナに來た外国人が住んでおり、十字架を礼拝している、と言った。さらに、彼の言うところによると、その外国人たちの唱える教義のある部分は、彼らが唱える書物にも入っているとのことだが、これは詩篇のことかもしれない。この外国人たちは、その地のサラチエーノ人が、チーナ人に殺させるとおどしたために、あちこちにあった教会を棄て（彼はすでに偶像教の寺院〔開王廟〕に改造された教会の名を挙げた）、身を隠し、一部の者たちは、ジューデア人の宗派の（一部）になったり、サラチエーノ人の宗派の一部になったが、大部分の者たちはチーナ人の宗派の一部になり、偶像を礼拝している。リッチは待望のキリスト教徒に関する情報をここで得たわけであるが、予期に反しそれはとてもリッチライエズス会士たちのカトリック布教の意欲を鼓舞するものとは言いがたかった。

このジューデア人は「旧約聖書」のなかの多くの物語を、たとえば、アブラム（アブラハム）、ユディッタ（ユディット）、マルドケーオ（モルデカイ）、ヘステル（エステル）、その他の物語を、語ってきかせた。とはいえ、その固有名詞の音は「わたしたちのものとは」非常に異なっており、彼のほうが正しくてエブレイオ（ヘブライ）語にもっと近いのかもしれない。それゆえ、彼はジェルザレンメ（イエルサレム）をヒエルソロイムと呼び、彼に言わせれば、來たるべきメツシア（メシア）をモシヤと呼ぶ。彼が神父たちに語ったところによると、カイフン（開封）にはエブレイオ語を知っている者が数多くおり、彼の兄弟もそのなかに含まれるという。が、彼自身は幼いころからもっぱらチーナの文字ばかり習っていたので、エブレイオ文字は習わなかったとのことだった。彼の話からわかったところでは、彼はチーナの文人の教えに従ったために、ジューデア人の指導者である祭司長によってシナゴークを追われ、なかば破門されていたのである。もしもドットーレの学位を取ったならば、彼はこの教えをあつさり棄ててしまったらう。サラチエーノ人もみなそのようにして、ドットーレの学位を取得すると、もはやモツラー（アラビア語のマウラー。主人・神の意）を恐れなくなり、教えを棄ててしまふ。

艾田は一族の興望を担える人物とはいえ、ユダヤの伝統教学には暗かった。滅びゆくへ開封ユダヤ人への黄昏を象徴せる人物といえよう。進士として漢人社会に迎え入れられたならば、もはや民族伝統に根ざす信仰をも棄てて顧みなくなるのであらう、とリッチは推測する。

艾田とリッチとの対面についての記録は以上であるが、そのちリッチは、一六〇七年（万曆三十五年）に、助修士アントニオ・レイタン（Antonio Leitao 一五七八？—一六一一）を開封に派遣し、キリスト教の遺物を調査させている。このときにも、キリスト教についてはさしたる収穫が得られなかったが、ユダヤ人に関しては新たな発見があった。

助修士は、ジュデア人がシナゴグに保存していた、エブレイオ語の書物の冒頭と末尾を書き写してもらった。それはわたしたちの「モーゼ五書」の文字と同じだったが、古い慣用に從っているため、文字の下に点がなかった。これは、つまり、いわゆる母音符号の未記入をさしている。母音を表示する補助記号は七世紀以後に考案されたものであり、それ以前のトーラーには母音が附されぬ子音のみで書き記されたものが通常である。後年、欧洲において、開封のトーラーは「キリスト受肉以前」のものである、といった誤った噂がたてられた。

リッチはユダヤ人コミュニティーの祭司長に宛てた書翰を助修士に持たせ、祭司長との面談を行わせている。

マッテオ神父はチーナ文字で祭司長に手紙を書き、パッキノには「旧約聖書」のすべての書物と、すでにこの世に生まれた救世主に関する「新約聖書」があると伝えた。しかし彼が助修士に答えたところによると、救世主はこれから一万年後に来るべき者だ、とのことであった。一方、彼らは神父について非常に良い評判を聞いていたので、もしも神父が豚肉を食べるのをやめて、彼らのところに来て暮らすつもりがあるならば、その地の祭司長にしてもよいと伝えてきた。

キリストを救世主とは認めないというユダヤ教の基本姿勢の直截な表出が見られる。さらに、興味深いことに、リッチの人物学識を見込んだこの祭司長は、己が後継者にとユダヤ教への改宗を勧めるのである。キリスト教徒の残存者探索を意図した開封行が、思わぬ結末を招来したようである。

そして、リッチの記録は、〈開封ユダヤ人〉のカタリックへの転向を思わせる、きわめて予想外の記述を以て締めくくられている。

このあと「一六〇九年」、その地から新たに三名のジュデア人がパッキノを訪れたが、彼らはキリスト教徒になるつもりできたので、あと数日だけでも滞在できたならば、容易に聖なる洗礼を受けたであろう。このなかのひとつはリチエンティアートのンガイの甥、すなわち彼と兄弟にあたる者の息子だった。神父たちは彼らを大いに歓迎し、

彼らもその師も知らなかつた彼らの教えについてさまざまな事柄を説明してやつた。また、すでに救世主は生まれており、彼らがわたしたちの教会で見たのはその画像だと話すと、三名とも跪いて、キリスト教徒のようにその画像を礼拝した。そして、チーナ文字で書かれた『キリスト教の教義』（天主教要）やその他のわたしたちの書物を持ち帰った。

この三名の者たちは、文字を知る者が誰もいないために、宗派がしだいに消滅に向かつているのを見て、ひどく心を痛めていた。やがて、かつてのキリスト教徒のように、異教徒がサラチエーノにならざるをえないことがわかつていたからだ。彼らによると、多少は知識をもっていた老祭司長もすでに亡くなり、そのあとを継いだ若い息子は、その教えについては何も知らないとのことであつた。彼らは、せっかく立派な寺院を造つても、画像ひとつなく、また礼拝堂や家に何ひとつ安置するものがないのは、とても悪いことだと思つていた。それゆえ、寺院や家に救世主の画像があれば、みなも深く信仰するようになるだろうとも言つた。とくになかのひとり、たとえば、祭司長みずから手で屠つた動物の肉でない限り、いかなる肉も食べてはいけないというような義務を祭司長が課したことに心を痛めていた。もしもこのパツキーノでそれを守ろうとするならば、飢え死にしようだろう、と彼は言つた。また、たとえば、生後八日で幼児に割礼を授けるといふのも、異教徒である妻や親族にはひどく残酷に思われると言つた。そして、もしもわたしたちがこういう儀式を免除してくれるならば、豚肉を食べることにはほとんど異存がないので、わたしたちの教えに従つてもよい、と結んだ。

そこでマッテオ神父は、良い機会に恵まれて都合がつけば、ただちにそこへ神父を派遣して常駐させ、その地のキリスト教の遺物を少しずつ見つけ出すとともに、こうしたジュデア人の改宗もはかることにした。しかしすぐにはそれを実行に移せなかつた。当時、その市の知事〔知府〕はキリスト教に好意的でなかつたばかりか、むしろ敵意を抱いていたからだ。

偶像を嫌悪し、厳格な食事規定を遵守し、割礼を尊ぶかつての心性はここにおいてはもはや喪われている。伝統習俗は足手まといの障害物として忌み嫌われてしまつたのだ。礼拝する画像のないことを慨歎するユダヤ人。彼等のその発想自体のうちに、もはや取り戻しえぬ民族伝統の黄昏がほの見えているのである。

3 〈回族〉〈回民〉と〈回儒〉

〈開封ユダヤ人〉について考察をめぐらす前に、そもそも〈ユダヤ人〉とはいかに定義づけるべき存在なのであるかという疑問に對し、いささかの回答を試みてみたい。

〈ユダヤ人〉、それは種族的集団なのであるか、それとも宗教的集団なのであるか。イスラエルにおいて通常用いられている定義は、①ユダヤ教を信奉する者、②母親がユダヤ人である者、というかなり雑駁鷹揚なものであるが、これはある程度世界的に受け入れられている枠組みといえる。①は特定宗教すなわち〈ユダヤ教〉を信奉するか否かに基準をおくものであり、②は要するに血統に重きをおいた定義づけである。この二項目のいずれかをみたせば、〈ユダヤ人〉の一員として認められる、とされている。したがって、血統的にまったく〈ユダヤ人〉ではない者であっても、他宗教から〈ユダヤ教〉へと改宗して〈ユダヤ人〉集団の構成員となつた例もあり、また〈ユダヤ教〉の宗教儀礼等を一切行わないが、その尊属に〈ユダヤ人〉の血統を受け継ぐ者がいるために、〈ユダヤ人〉と見なされている者も存在しているのである。

つまり、〈ユダヤ教徒〉＋血統的〈ユダヤ人〉＝〈ユダヤ人〉、という〈公式〉を思い描くことが可能である。

同様の例として筆者は、現在、中華人民共和国において用いられている〈回族〉〈回民〉という語に着目している。

張承志『回教から見た中国』〔中公新書〕一一二八、中央公論社、一九九三〕「まえがき」によれば、まず〈回民〉とは、〈漢民〉に對する語で、〈漢民〉と同一の言語を用いつつも「特殊な信仰（つまりイスラーム）および生活習慣を持つ国民」とされている。そして、〈回族〉とは、「宗教信仰を問わず、血縁的に両親の一方が回民」である者であり、「回教徒と、信仰を持たない回族出身の人の両方」を含んでいる。これらの定義は、既述の〈ユダヤ人〉ときわめて類似しているといえよう。漢族出身の者であっても、イスラームを信奉するならば、〈回族〉〈回民〉なのであり、ムスリムではないが、血統的に尊属にムスリムを有しているならば、〈回族〉〈回民〉として認められるわけである（なお、〈回民〉は民国時代に常用された語で、〈回民〉を独立した一民族として規定しないという民国政府の慎重な姿勢に基づくものであり、〈回族〉は共産党

政府成立後、〈回族〉を漢民族とは別単位の独立した少数民族として処遇する意図が反映した用語である。

〈回族〉〈回民〉の言語面における境遇を、張承志は〈回族〉の一員として悲哀をこめて記している。

今、回民は漢語で話している。しかし、昔の彼らの祖先はアラビア語、ペルシア語と中央アジア諸語で話していた。回民にとっていわゆる「母語の喪失」を、……第一の喪失とした故郷の喪失と並び、「第二の喪失」と呼ばせていた。だきたい。（張承志、前掲書、四十四頁）

この記述を読んで心動かされる者は、〈開封ユダヤ人〉のおかれた境遇にも悲歎をもって思いを馳せることは困難ではなからう。ヘブライ語を忘れ去り、漢語のみで日常生活を送るユダヤ人。共同体における文化消滅の危機は、まず日用の言語から訪れるものである。しかしながら、〈回族〉〈回民〉は、母語を喪いながらも、現代まで命脈を保ちえたのは、いかなる理由によるものであろうか。

……今始まった経済時代とともに、来るであろう「国際化時代」に、回教は、……祖国中国と一緒に、大きな試練に直面するであろう……。迫害にも消滅しなかった信仰が、金銭の誘惑に消滅してしまう可能性は、誰もないとはいえない。都市の回教が立派なモスクを観光地にして自然消滅の結果に終わり、農村の回教が文化と教育の不足で危機的な立場に追われてしまうのも、あり得ないことではない。千何百年も存在した中国ユダヤ教が滅亡したのと同じように、回教と回族すなわち宗教と民族が、ともに中国文化の海に溶けこんでしまう可能性は、常に存在している。（張承志、前掲書、百八十五ページ）

〈回族〉〈回民〉が、現代に至るまで独自の地歩を保ちえてきた理由として、まず第一に考えられることは、〈回儒〉というアラビア語に基づかない独自の文化の担い手の創出を挙げざるべきであろう。母語であるアラビア語を喪失するとともに、漢人文化の大海に投げ出された回教徒たちは、漢族の伝統思想である儒教のなかにイスラームとの接点を見出したのである。しかもなお、単に儒教哲学の概念を修得するのみならず、新たな装いのもとに儒、仏、道の三教批判を流麗な漢語をもって書き綴ったのである。勿論、そこに至るまでの道のりは永く遠いものであった。唐代に渡来したとされるムスリムたちが、幾多の苦闘を経て〈回儒〉を産み出すまでに至るには、約千年後である明代末期の碩学王岱輿（一五八〇？—一六六〇？）の登場まで待たなければならなかった。王岱輿の手になる教理学書『正教真詮』（一六四二）の刊行こそ

は、教祖ムハンマドとの共有語を喪い、遠き異邦に永住しながらも、伝統を保持しようと努めてきたムスリムたちにとって、まさしく待望の精神的支柱の樹立であったといえよう。これは決して溢美誇大の言辭ではない。その当時、『コーラン』の漢語への全訳はまだなされていなかったことを充分に考慮に入れる必要がある。王岱輿のちを承けて、清代において馬注（字文炳、一六四〇—一七一）、清真指南（一六八三）等、劉智（字介廉、一六五五？—一七四五）、天方性理（一七〇四）、天方至聖実録（一七七八）等、馬德新（字復初、一七九四—一八七四）、四典要会（一八五九）等）といった錚々たる学匠にその道統が受け継がれてゆくさまは、まさに思想史上の一大奇観とも称すべきものである。

ここで顧みて、〈開封ユダヤ人〉に思いを致すに、許多あるであろう〈開封ユダヤ人〉消滅の原因のうち、思想營爲において果敢な活躍を成し遂げた〈回族〉と異なり、漢人文化との精神的対決という姿勢の欠落がかなりの比重を占めるものと断じて差し支えなく思われる。つまり、〈開封ユダヤ人〉は決して〈猶儒〉と称すべきほどのものをもたなかったのである。彼らは、孔教の習学に励むと同時に、自民族の伝統思想を綺麗さっぱり打ち忘れてしまったのである。

彼らは一面純乎として至極潔癖であったともいえる。しかしながら、漢民族のもつ怒濤の如きダイナミズムに對抗するには、漢人文化を旺盛に吸収し、漢人を凌駕するほどのヴァイタリティを發揮しなければ、埋没の運命が待ち受けているだけなのである。

漢民族は不撓不屈の種族である。^[1]その社会のなかで生き延びてゆくには、したたかに漢人文化の精髓を堪能し、自家薬籠中のものとした上で、さしづめ利瑪竇が『天主実義』においてなせるが如く漢語を縦横に駆使しつつ、粘り強く己が信仰、己が民族の主張を展開することこそが肝要なのである。これは千古の真理である。^[2]

4 近年の研究成果

以下に〈開封ユダヤ人〉とその周辺に関する中文で書かれた近年の研究成果のうち重要なものを紹介する。

すでに触れた陳垣（一八八〇—一九七二）の「開封一賜業業教考」は、中文による最初のまとまった研究成果であるが（初出は一九二〇年二月四月発行の「東方雜誌」第十七卷第五—七号である）、それを受け継いで欧文資料をも博搜参照した成果が、

潘光旦（一八九九—一九六七）による「関于中国境内猶太人的若干歴史問題」である。これは、一九五三年六月に中央民族学院において参考用に印刷されたが、そのうち、著者の没後十余年を経て「中国社会科学」誌上に掲載され（一九八〇年第三期）、さらに一九八三年三月に北京大学出版社より『中国境内猶太人的若干歴史問題——開封的中国猶太人』として刊行された。

これは、「第一章 族与教的名稱」「第二章 開封的猶太人進入開封的年代」「第三章 中国其它有過猶太人的地方」「第四章 一般的中国猶太人進入中国的時代」「第五章 猶太人所従来の国家与路線」「第六章 猶太人離開本土的年代」よりなり、「附録」として「一 書目」「二 史料匯編」が併載されている。文献資料面での調査については、この研究により、ひとまず完了したものと評価しえよう。

つぎに、一九八二年十二月に江文漢『中国古代基督教及開封猶太人』（知識出版社（上海））が刊行された。この書は、前半部で景教および元朝で興隆したキリスト教である「也里可温」について論じ、後半部で「開封ユダヤ人」をはじめとする渡来ユダヤ人について、章を「一、猶太人与猶太教」「二、西方传教士对中国猶太人的“发现”」「三、從開封的猶太碑來看開封的猶太人」「四、上海的猶太人与開封的猶太人」の四つに分ち、略述している。末尾には、「開封ユダヤ人」の來歴等を記した三種の碑文（「重建清真寺記」（明・弘治二年（一四八九））、「尊崇道經寺記」（明・正徳七年（一五一二））、「重建清真寺記」（清・康熙二年（一六六三）））それぞれの現在判読可能部分すべてを掲載している。

一九九〇年代は空前のユダヤ人研究ブームともいへべき様相を呈した。まず注目すべきは、上海三聯書店より「希伯來文化与中国猶太人」と題するシリーズの第二巻として張綏「猶太教与中国開封猶太人」が、一九九〇年三月に刊行されたことである。この書の特徴は、後述する如く、「開封ユダヤ人」の現状の徹底調査にあり、とりわけユダヤ人に顕著に現れるとされる遺伝病である Tay-Sachs 病についての論及は、他に見られない独自の意義をもつものである。

それから、同じく上海三聯書店より顧曉鳴主編「猶太文化叢書」が刊行された。予定書目は全二十冊ではあるが、筆者の入手分六冊に限って刊行順に列挙すれば、以下の通りである。

①傑拉爾德・克雷夫茨（顧曉駱）『猶太人和錢——神話与現実』一九九一年四月（Gerald Kreftz. Jews and Money. The Myth and the Reality. New Haven, Ticknor & Fields. 1982. 〇翻訳）

②戴維・克蘭茨勒（許步曾訳）『上海猶太難民社区』一九九一年十二月（David Kranzler: Japanese, Nazis and Jews: The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945. New York: Yeshiva University Press, 1976）の翻訳

③唐培吉＋許步曾＋嚴惠民＋顧伯榮＋鄭依柳『上海猶太人』一九九二年八月

④朱威烈＋金心忠編『90 中国猶太学研究総匯』一九九二年八月

⑤林太＋張毛毛編訳『猶太人と世界文化——在科学、文学和社会法律的維度上』一九九三年四月（Louis Finkelstein: The Jews: Their History, Culture, and Religion. New York: Harper & Brothers Publishers, 1960）の抄訳

⑥羅伯特・M・塞爾茨（趙立行＋馮璋訳）『猶太的思想』一九九四年六月（Robert M. Seltzer: Jewish People, Jewish Thought: The Jewish Experience in History. New York: Macmillan, 1980）の翻訳

次に、上海人民出版社より徐新＋凌繼堯主編『猶太百科全書』の刊行を見た（一九九三年八月）。これは、Encyclopedia Judaicaの Chinese edition とも称すべきものであり、ユダヤ関連の万般の事項について約千六百項目にわたり網羅している。わが国においてもこれだけの規模をもつユダヤ事典はいまだ現れていない。

さらに、一九九三年から二〇〇〇年に及んだ大部の出版事業として『潘光旦文集』全十四巻の刊行がある（北京大学出版社）。潘光旦はまさに掲げた「開封ユダヤ人」研究の業績を有するとともに、社会学、人類学等の領域にわたる広汎な研究成果を遺した。筆者所持の第一―五巻のみについて内容を紹介すれば、左の如し。

第一巻（馮小青——一件影恋之研究）「中国之家庭問題」「優生概論」「日本德意志民族性之比較的研究」一九九三年九月

第二巻（読書問題）「中国伶人血縁之研究」「人文史観」一九九四年十月

第三巻（民族特性与民族衛生）「明清兩代嘉興的望族」一九九五年九月

第四巻（存人書屋歴史人物世系表稿）一九九六年十二月

第五巻（優生与抗戰）「自由之路」一九九七年十月

なお、民族出版社（北京）からは、潘光旦の遺した業績を鳥瞰する恰好の書である『潘光旦民族研究文集』が一九九五年四月に刊行されており、収載全二十二論文のうちユダヤ関係論文として「猶太民族与選択」「民主：国家的な一筆法西ス眼——美国「反猶太運動略史」の二点が採録されている。

註

(1) 「我々は……」「患難の配布」にあずかった時、その時のみ、人間であるのではなからうか。……凡そ、人間は、生活の苦勞に、あ
るいは何か「患難」に耐えさせられている時にかぎり、人間として生きているのではなからうか。……「患難」が取り除かれた
人間は、これはもう人間にならない……。

……

「利巧者」は、幸福な人間は、人間のエンタシスを持っていない。だから、もしかすると人間ですらないのかも知れない。上方か
らの「重」さを感じないでおればこそ、「利巧者」なのであり、幸福な人間なのである。しかし、このえたいの知れない「重」さ
を背負い、耐えつづけていればこそ、人間に張りがある、ふくらみが、エンタシスが出る。そして、そうしてはじめて、人間は人間
として、直線ではない人間として、見えてくるのである。(「新保祐司『内村鑑三』(構想社、一九九〇)九十七〜九十八頁)

(2) 小説ではあるが、安部公房『榎本武揚』(「中公文庫」、中央公論社、一九七三)は幕末維新期の転向問題に肉薄しており、頗る示
唆に富む。

(3) 汪政権に関しては、次に挙げる二著が必読書であろう。

・金雄白『汪政権の開場与収場』全三冊(「真相叢書」第七〜九卷、李敖出版社(台北)、一九八八)

・汪瑞炯+李鐸+趙令揚編註『苦笑録』陳公博回憶 一九二五至一九三二(「亞洲研究中心專題討論」第三十六、香港大学亞洲研究

中心、一九七九)

(4) 西尾陽太郎『李容九小伝 裏切られた日韓合邦運動』(葦書房、一九七八)を参照せよ。

(5) 無論李贄はカトリック布教に理解を示しているわけではない。

「……利西泰、西泰大西域人也。到中国十万余里、初航海至南天竺始知有仏、已走四万余里矣。及抵広州南海、然後知我大明国
土先有堯、舜、後有周、孔。……

但不知到此何為、我已經三度相会、畢竟不知到此何幹也。意其欲以所學易吾周、孔之學、則又太愚、恐非是爾。」(李贄「与友人
書」(「統焚書」卷一 書彙)

(6) 陳垣「開封」賜業業教考」第六章「人物之大略」によれば、「艾田、万曆癸酉举人、官知県。艾儒略撰利瑪竇行蹟云、中州都会、
原有教堂、乃如德亜(即猶太之明訳)国所伝天主古教。適其教中艾孝廉計偕入京、造訪利子、利子將經典大全一部(即旧新約)、係
如德亜原文、並附訳大西文字示之。艾君誦読其文、深喜而拜焉。此所称艾孝廉、即艾田也。艾田蓋亦諳希伯来文者。道光末西土所
録寺中楹聯、有艾田所撰一聯、其孫艾顕生重刊之。」とあり、後述の如く、ブライ語を解さない者とはされていない(「陳垣學術論
文集」第一集(中華書局、一九八〇)二二八十一頁)。

(7) 「猶太教と回教不同、人或混視爲一。推原其故、則回教爲吾人所習見、回教寺名清真、一賜樂業寺亦名清真。……開封猶太族、……習俗与回教略同、回教奉祀一神、一賜樂業亦奉祀一神、回教守安息日、一賜樂業亦守安息日、回教每日五時禮拜、一賜樂業亦每日三時禮拜、回教行割禮、一賜樂業亦行割禮、回教不食猪肉、一賜樂業亦不食猪肉、……以此種種、局外人容易混視。今開封人稱一賜樂業爲青回教、或藍帽回子者、因其用於儀式之纏頭布及靴等、皆青藍色、与回教徒之用白色者殊、亦知其有別也。」(陳垣「開封一賜樂業教考」第五章「与回教之異同及挑筋教之名所由起」(前掲書、二百七十九頁))

(8) なお、さきに触れた李贄の先祖は回教徒であったが、一族から漢人社会での要職に就く人物を輩出するようになることもムスリムとしてのアイデンティティを喪失していたものと思われる(また、「聊齋志異」で名高い蒲松齡の先世も回教徒であるとの推定がなされている。前野直彬「蒲松齡伝」(「秋山叢書」、秋山書店、一九七六) 十二頁以下)。

(9) モーリス・オランダール(浜崎設夫訳)「エデンの園の言語」(叢書・ウニベルシタス)四七三、法政大学出版局、一九九五) 第二章(三十二頁以下)を参照せよ。

(10) 小冊子ではあるが、余振貴「王岱輿」(「回族歴史人物故事叢書」、寧夏人民出版社、一九八六)は、その人物および業績を的確に紹介し得て余蘊がない。

(11) 漢人に支配される少数民族の苦闘について考察する場合、北魏、金、元、清といった異民族による歴代王朝の対漢民族政策について一瞥することも大いに意義がある。『異民族の支那統治概説』(「資料」乙第六十二、号C、東亜研究所、一九四三)、薛文郎「清初三帝消滅漢民族思想之策略」(「文史哲学集成」一三七、文史哲出版社(台北、一九九一))を見よ。

(12) 抗争なくして信念の持続なし。(「開封ユダヤ人」と異なり、(「回族」は、漢人との絶えざる闘争の歴史を有する。漢人の(「回族」に対する差別意識は、宋の遺臣・鄭思肖の『鉄函心史』巻七「大義略叙」に「彼俗不食猪、俗軀爲回回之先所自出也」と見えることから推して知るべし。(「開封ユダヤ人」は、回教徒と同一視されたといえども、漢土においていまだかかるとするや、必ず先ず其のけたりという記録なし。『孟子』巻第十二「告子章句」下第十五章に曰く「天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先ず其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしめ、其の体膚を餓せしめ、其の身行を空乏せしめ、其の爲さんとする所を乱れしむ。心を動かして性を忍ばせ、其の能くせざる所を曾益せしむる所以なり」と。安穩なる環境に榮光への路程は兆や^や。

(13) 予定書目中に「河豚魚計画」があるが、これは Marvin Tokayer and Mary Swartz: The Fugu Plan: The Untold Story of the Japanese and the Jews During World War II. New York and London, Paddington Press, 1979 (翻訳せらる。その書には邦訳がある(加藤明彦訳「河豚計画」日本ブリタニカ、一九七九))。

(14) 同書収録論文は左の如し(掲載順)。
唐裕生「希伯来人、以色列人和猶太人」／徐向群「試論猶太民族精神」／顧曉鳴「論猶太文化的特徵及其發生」／杜幼康「猶太民族的凝聚力簡析」／陳超南「猶太《聖經》与欧洲芸術」／范明生「猶太教神学是東西方文化的匯合」——論斐洛的「神学」／龔

方震「祇教与猶太教、基督教的比較研究」／潘光十余建華「試析早期猶太復國主義理論之形成及其思想淵源」／趙国忠「試論猶太軍事組織的地位和作用」／陳万里「早期猶太人和阿拉伯人的關係」／沐濤「埃及猶太人的歷史變遷」／蔡偉良「阿拉伯馬格里布的猶太人」／潘仲秋「西班牙歷史上上的猶太人」／季惠群「中世紀歐洲猶太人的商業活動」／竜杏雲「蘇聯猶太人的形成和文化特点」／陳和豐「戰後美国猶太人的社会地位与政治傾向」／王維周「以色列猶太人的来源、組成及矛盾」／張倩紅「試論希特勒的反猶政策」／龔方震「糸綢之路上的猶太商人」／沙博理 (Sidney Shapiro)「古代中国的猶太人——一些新發現」(余建華訳)／徐伯勇「開封猶太人的幾箇問題」／王一沙「中国古代猶太人及其後裔的遷徙和分布」／龔方震「关于对中国古代猶太人研究的評述」

また、卷末には一九八〇年代に公表された関連文献の一覧および同書刊行時点で結成されているユダヤ学研究団体・機関（上海猶太学研究会、和平与發展研究所以色列・猶太研究中心、同濟大学社会与文化研究所猶太学研究室、南京猶太文化研究会）についての簡単な紹介が附されている。

(つづく)

(二〇〇三年十一月十一日)

〔謝辞〕

鹿兒島大学歯学部 の佐藤友昭さんより Tai Sachs 病関連論文収集に御協力をいただきました。誠に有難うございます。続稿では御厚意の賜物を存分に活用する所存です。